

理解

「是非知らず邪正もわかぬこの身なり……名利に人師をこのむなり」(親鸞聖人)
「人知らずしていからずまた君子ならずや」(孔子)

広い心

一人の人が悪事をはたらく。それを責めたり、罵つたり、悪口したりすることは誰にでも出来る。

しかし一人の悪人が出来るためには、そこに相当の理由がある。

広い温かい心で抱いて、心から理解してやる人がいない。

知りつくす時、いかなる悪人でもにくめない。

心霊の扉をとぎしたひねくれ男の前半生にも、理解を求めて得られなかった人間らしい涙の日はなかつたらうか。

どんな人をも抱き得る、広い心になりたい。

理解

子供に対する理解が足りない。

妻に対する理解がない。

夫の仕事に対する理解がない。

理解のない親や夫は、子供や妻に対する暴君である。

暴君の政治は圧迫である。抑圧の加えられた世界に真の自由はあり得ない。

自由を求める心は、生命ののびんとする必然の願求である。自由が蹂躪せられる世界では人は真に楽しく生き得ない。

親の心と子供の心とが別々の世界に住み、夫と妻が別々の世界に生き、兄弟が違つた道をたどつてゆく時、家庭は暗黒の闇となる。

愛の問題

求道の日、私はあなたを、火が出るほど叱つた。

あなたの生活態度が不真面目だとして、あなたの過去が全部駄目だとして、まっ向から、あなたの心が碎けるほど叱つた。

それなのに、あなたは少しも、腹を立てなかつた。

怒るところか、あなたと私とを離れることの出来ない関係に結ぶ。

叱られて離れるどころか、「有難うございます」と礼をいう。

そうだ、真の理解さへともなうならば打たれても感謝する。

理解の根本義は愛の問題である。

誤解

理解の反対は誤解である。

我らは全て凡人である。凡人の常として誤解する。神でない以上誤解することは止むを得ぬ悲しい事実である。

我らは我らに誤解のあることを忘れまい。

誤解だと知った時、直ちに訂正するだけの勇氣を持ちたい。

殊更にまげておとしいれるために構えて間違いを言いふらすが如きは人間の沙汰ではない。おとしいれるためになされたことは人をおとす前に自らおちる。

人生途上いくらこの穴が待つ。

地上

正しく理解されたいことは人間の持つ根強い欲求である。

しかし地上は何時でも正しく理解されるものではないことを知らねばならぬ。

百が百、正しいものが正しいと理解されるならば人生は機械である。そこに真実なるものの権威はない。

我らは正しく理解されることを求めるより先に、我ら自身が正しくあらねばならぬ。

太陽の前にも雲がかゝる、しかし太陽が正しきの承認を求めた日はない。

人生は正しき生活を願求すべき道場であつて、他の承認のために生きる所ではない。

人格の方向

栖心寺という寺で、夜明け前にあつたことである。

若い女の声が「先生！ 々々！」と私をくり返して呼んだそうさ。

寺の奥さんが翌朝、私に問われたが私は知らない。

この場合二つの想像が語られた。

一。信仰上のことについて求めて来た感心なる女性ではあるまいか。

二。色情関係の誘惑のために来た女性ではあるまいか。

しかしそれはどちらでもなかった。置炬燵の火が消えてはいないかと心配した隣のおばさんが感心にも訪ねてくれたとのことであつた。

誤解は誰にでもある。しかし誤解は人格の方向を決定する。

国政

国家の政治を左右する政治家に国家の現状や、国民の志願を理解する眼や耳がないならば、彼らは一国の前途をあやまる。

国民の志願を理解するとは、民衆にひきずられてゆくことではない。

単なる事務官は至る所にある。しかし国民の本願の源流に立つて、それを具体化する人がいない。

ましてや、自己の地位のためや名誉のためにたつ者は、国民を犠牲にする国賊であつて、政治家ではない。

普選による総選挙が行われる。我らは厳正なる批判の上に立たねばならぬ。

威圧

井戸の中の蛙のように、大海を知らずして小さき城に立籠り、自家の利益のために、人を悪罵する。

明治初年の考えをそのまゝに持つてちつとも変えず、伝統的に与えられて来た権力に立って、愚にして弱き者を威圧して、口を開かしめず。

「民は依らしむべし、知らしむべからず」の封建時代そのまゝに暴力を振るう悪魔が至る所にはびこっている。

彼らに与えられた地位と権力に比例して、社会に及ぼす害は大きい。哀れなるものは、愚かなる民衆である。奴隷に生活はあり得ない。

彼らは時に彼らの忠実なる味方である友を敵として殺す。

うわさ

人から人のまた聞きや、単なるうわさ話で聞いたことを土台にして、作りあげた自分の考えを民衆の前に叫んではならぬ。

雑作もなく語られた一言葉がどんなにその人を傷つけるか知らない。

間違いを伝える新聞記事、誤解から誤解へと流れてゆく人のうわさ、それらが時に人の一生を支配する。

謹め、その口を。その舌の根が動く方向が汝の人格の動く方向だ。

弱き善人は、舌三寸によつて動かされる。言葉は時に軍隊よりも強い。

知る眼

釈尊を理解するには、釈尊を知るだけの智慧がいる。

親鸞聖人を知るのには、聖人と等しい流れにおらねばならぬ。

高いものや尊いものを知る眼はそのまま高いものであり、尊いものである。

仏を知るものは、仏の智である。

どれだけ高いものを見たか、どれだけ尊いものを知ったか。それが汝の問題である。

深い世界を持った方でも、浅い者から見ればまぢがいに見える。

愚かであることはそのまゝ、時には罪惡である。

化ける者

どれだけ知ってもらったか、どれだけ認めてもらったか。凡人は唯それだけを問題にする。

二割か三割か高く買われたい。買われたいから化ける。

化けるくせがつくと、化けることが平気になる、化けていることさえ忘れる。

悪魔の唯一の働きは化けることにある。

化けた相をほんものだと思ふようになる時、

進歩も向上もなくなつて、世間的な成功だけに生きる人となる。

忠言

短所をも知りつくし、長所をも見てとつて、短所を叱正し、長所を指導啓発してもらうことを師匠に求める心はなくてはならぬことである。

ほめる者に耳を貸して、正しく導く者の批判に耳を貸さぬは凡人である。

良薬は口にながく、忠言は耳にさからう。

良君は忠臣の言によつて己を改め、暴君は奸臣の媚びてする、甘言に乗ぜられて一國を乱る。

我を訓戒し、我に忠言する者の心事を理解せよ。特に己より年少下位の者の忠言を尊重せよ。

凡人

自分の真価より高く買われることがある。

自分の実際より低くみくびられることがある。

高く買われて高慢になり、低く見られて卑下するは凡人である。

他人が見てくれてもくれなくても、自分を高めることに力をそぐれば真のよろこびと向上がそこにある。

聳えた山は遠くからでも見える。しかし時には小山のかげになることもある。

如何に見られるか、それが問題ではなくて、如何に生くるかが問題である。

道をゆけ

夫にも子供にも愛想つかされ、友人からも棄てられるような女が、

麗々しく写真入で新聞記事に書きたてられることがある。

名もなき一家の主婦として台所で一生ををわる女とそもそもどちらが勝れる人か。

徳は名にまさり、道は賞讃よりも永遠である。

一台所の改造原理がやがて一國の改造原理である。

知られることを求めるより先に汝の道をはつきりせよ。理解されざることを怒るより先に、汝の生命の上に信念をもて。汝を知る者は汝である。

恨むよりも

汝に都合のよい者に善の名をかぶせ、汝の気にいらぬ者に悪名をかぶせる。

こうした心持で人の上に正邪善悪を言わぬことはむずかしい。

理解せよ。人にはそれぞれの立場がある。

理解をいたずらに求めるなかれ。人は決して神ではない。

恨むより先に、真実の足らざるに泣け。

努力した者にはさきの誤解すら生きて来る。

誤解の人に話しかけて道草を食うよりはずんずん汝自身の道を行け。

汝はよく愚痴より遠ざかる。

至尊の前に

天に無数の星群輝き、他に生きる者の胸に、至上絶対の声きこゆ。
聖者哲人は厳肅なる真理の殿堂に耳をよせ、
愚者凡人は騒々しい巷の評判に流されてゆく。
迷える者にほめられて有頂天になるほど愚かなるか、
迷える者にくさゝれて暗くなるほど自信なき汝なるか、
唯一至尊の前に頭をうなだれて黙せる声のみ旨にかえれ。
理解以上の理解、充されて安らかなる、微笑の世界の門が開く。

眞実生活の権威

無量寿如来

七百年の古、日本は群生の悩みの中から、大乘仏教の極致を身をもって体得した聖者を生んだ。親鸞聖人がそれである。

罪悪生死の凡夫、必墮無間の愚禿、それが聖人の機の深信であったが、その無意識界中には無量寿如来燦然として生きたもうてあった。聖人の眼中、無量寿如来を置いて他に全て価値あるものはなかった。されば聖人の全人格はこの尽十方無碍光如来をおいて考えることは出来ない。

聖人は偉大であった。その偉大は如来の廻向顕現せる偉大である。随つて南無阿弥陀仏は聖人の一切であった。

あえて重ねて言う、親鸞聖人はただ無量寿如来に救われ彼の如来と仏凡一体なりしが故に偉大であった。

金剛の眞信

時は七百年の昔である。日本のその当時の現状を思う。

人心は未だ幼稚であり野蠻であり、文化の程度の低いために、迷信的盲目的神秘に禍まじないされて、朝も野も共に怪物ものけに占領されて、悪鬼、狐狸の横行を信じて迷信祈祷、禁厭まじないの大流行の時であった。

狐が人を迷わすという考え、悪鬼怨霊が人につくという考え、幽霊が人をなやます6という迷信、それがまだ、物質文明の進んだ昭和の今日でも民間を流れて、愚夫愚婦を支配する。まして七百年の昔である。日本をあげて、この暗黒の中に迷わされたのも無理はない。

かかる暗黒のただ中に、尽十方無碍の光明に救われ、大燈明高く提げて立つたのは聖人であった。

聖人の心は金剛の信念の上に立てられた。

だから聖人の眼中、如来をおいて他に何等の権威も威神力も、神通もなかった。如来の智慧は聖人の智慧である。

正しいものの見方、正しいものの考え方、聖人の前にはただ如来のみあった。

聖人は祈禱を禁じた。まじない、占い、一切合切かかることに用事がなかった。勇氣とは何をいう。力とは何をいう。

弱者愚人の唯中に、一切かかる愚見迷信を引破つて立ちたもうは大勇猛心、大慈悲力、大信力なくて出来るであらうか。

ああ、金剛堅固の大信心

「光明偏照十方世界 念仏衆生撰取不捨」

「念仏者は無碍の一道なり、そのいわれ如何とならば、天神地祇も敬服し魔界外道も障碍することなし……………」

神という神、仏という仏、それは実に念仏の子を護念したもう。何ぞ祈祷を用いん。八卦占い全て要あることなし。

幽霊

洋服を着た幽霊、自動車にのる幽霊たちが、電灯の下で、笑うべき運勢判断を受ける。疾病にかかれれば祈祷をはじめ。しかもそれが堂々たる鉄筋コンクリートの大建物の中で行われる。愚なる祈祷が裏切られているのを知らないのだ。愚智なる文明人たちが大東京の唯中にこの病氣平癒の祈祷を乞う。朝に夕に不正直極まる都会商人たちが商売繁昌を神棚にむかつて祈る。愚の極である。施行に出かければ、その出発の日柄を言い、その方面をうらなう。笑うべき愚の極である。

これ全て金剛の信心のないためである。

家屋を立てれば、地相を言う。建てる日柄を言い、それを一々占いに問う。死人がある、たとえば死骸は腐つても、日柄を言つて葬式を出さぬ、笑うべき愚の極みである。

七百年の昔、かゝる世界を出てしまつた聖人もあるのに、飛行機飛び、ラジオの放送を聞きつゝ、東京市民の過半数がこの迷信の中にさまよふ。

人は正信を有せざる限り、迷信に盲信に迷う愚者である。たまく、災難に出くわした自動車の中に僧侶がいたとて、運転手の不注意と道路の不完全とを忘れて、自動車の中に新らしい迷信を造つて、神の護札をさげる。

彼らは口ぐせに文化という。何の文化ぞ。物質文明は精神文化ではない。

吉凶なし

一年三百六十五日、我にとつて一日の吉凶なし。

いづれの日に旅立つても吉凶なく、いづれの方向に向かうも、全て障りなく吉凶なし。

人間にまさる狐なく、我をまどわす物の怪なし。

たとえ、身は大病に悩み、立つ元氣も、座する力はなくとも、我に敵とう一切の悪魔鬼神あることなし。

無量寿如来の神威力の前に一切の鬼神悪魔、あることなし。

病氣になれば医術の力によれ、もしそれで全快せねば、それまでである。

家をたてれば、使い便利と、衛生と、美観とを考えれば足りる。

幸なる哉。千万人は家向を考え、鬼門を考え、日柄を言うとも、我にその全てがない。

家内安全を邪神に祈る愚よ、息災延命を魔殿に祈る愚よ。

真の信念のなき哀れなる徒輩の愚を笑うよりも寧ろ悲しむ。

権威

如来は最高の実在、無量の大功徳、絶対の価値、尽十方無碍の光明である。

念仏の衆生とは、かかる如来と一体に生きるものである。これを獲得せるものである。

故に何の福を現生に求めよう。求むべき福もなく、去らねばならぬ禍もない。

たとえ、貧苦、病魔、怪我、火災等の禍に遭遇するも、それは決して鬼神変化方向日柄によつておこるのではない。これことごとく自業自得、縁によつて起る仮想にすぎぬ。我らの運命を支配する何物の存在も認めぬ。

もし福のうくべき因縁あらば、求めずとも来り、うくべき因縁なくば求むるとも獲ることは出来ない。

幸運である時、健康である時、若い時、人は大概大言壮語する。しかし一度病氣にかゝり、家運衰へ、死人相續いて出で、家産かたむく時は、幽霊となり、運命論者となり、弱者となり、迷信者となつて祈祷卜筮等に走りはじめ。邪教はここにつけてんで迷信から迷信にひき回す。全て金剛の真信のなきためである。

金剛堅固の真信に住すれば、たとえまげて悪鬼神ありとするも、我が毛髪一本もこれを左右することは出来ない。

親鸞聖人高らかに歌つて曰く

「願力不思議の信心は大菩提心なりければ

天地にみてる悪鬼神みなことごとくおそるなり。

南無阿弥陀仏をとなふれば観音勢至はもろともに

恒沙塵数の菩薩とかげの如くに身にそへり。

無碍光仏のひかりには無数の阿弥陀まし〜て

化仏おの〜ことごとく眞実信心をまもるなり。

南無阿弥陀仏をとなふれば十方無量の諸仏は

百重千重圍繞してよろこびまもりたもうなり。」

信仰生活は、弱者の安慰気休めではない。人間の苦闘にたえかねた者の安息所ではない。人生を傍観するものの逃避所ではない。

大地の上をふみしめて、堂々苦海にのり出したものの、正しい最高の生活である。權威である。

聞け、眞実の招喚の声は汝の上に不斷にそそがれてある。

一切の美しい化城に道草を食うて懈怠することなかれ。